

1. 総 説

1. 本 県 管 轄 の 沿 革

原始 千葉県に人類の最初の足跡がしるされたのは、今から約3万年前のことであった。当時は氷河時代の終末期で寒冷な気候であったが、人々は遊動しながら狩猟と採集を生業としていた。この旧石器時代の遺跡は県内全域に分布する。1万年ぐらい前になると気候が急速に温暖化し、森林の景観の発達を背景に、定住的な狩猟・採集生活が開始された。縄文時代の幕開けである。この時代には土器が生活用具として定着し、新たに漁撈が生業に加わる。県内にも多くの貝塚が形成される。また、黒曜石や翡翠などの交易が行われるなど、地域社会の形成と相互交流が認められる。ところが、縄文時代の終末に近付くと、西日本では稲作農耕が開始された。その余波は千葉県にも及ぶようになり、紀元前1世紀頃には農耕集落が営まれ弥生時代以降の社会の原型がつくられる。

古代 3世紀になると「卑弥呼の邪馬台国」に代表されるような各地に点在した小国家が、畿内の有力豪族のもとで統一の方向に進み、高塚の墳墓に象徴される古墳時代を迎える。3世紀の中頃には、房総半島にもその影響が現れ、小規模ではあるが前方後円形の古墳も造られる。その後、4世紀～7世紀中頃まで県内には多くの古墳や横穴墓が造られており、なかには畿内の勢力や朝鮮半島との強い関連が想定される遺物を副葬する古墳も存在している。

奈良時代には、上総国・下総国・安房国にはそれぞれ国分寺が建立され、なかでも最近の調査によって上総国分寺は、全国でも有数の規模であることが判明している。また、国衙や郡衙等の役所の所在も確認され、房総の特産品として麻や干し鮑等も中央貴族の手元に届けられることが平城京から出土した木簡から明らかになっており、当時の中央集権国家の一端を知ることができる。

平安時代には、律令体制も衰退を迎え、武士が台頭して、平将門や平忠常の乱が起こり、房総の地は一時荒廃した。しかし、忠常の子孫にあたる千葉氏や上総氏が勢力をのびし、房総は一躍歴史の表舞台に登場し、時代は一気に中世を迎える。

中世 東国水上交通の要衝であった房総では、平安時代末期以来、国衙内の有力者であった上総氏と千葉氏が、幕府の有力御家人として活躍した。上総氏は、源頼朝に滅ぼされるが、下総国は千葉氏が支配し、上総・安房国は、足利氏・二階堂氏などの有力御家人、円覚寺など鎌倉寺院の支配下となり、房総各地に鎌倉幕府関連の荘園が多数成立した。

室町時代になると、房総は、室町幕府の出先機関である鎌倉府の支配下に入る。特に、関東管領上杉氏が上総守護になり、房総は千葉氏とともに、上杉氏の強い影響下に入ることとなる。

しかし、15世紀中頃、鎌倉府の内紛に伴い、下総国では千葉氏宗家が滅亡、上総・安房国では上杉氏の勢力が後退し、武田氏や里見氏の新興勢力が台頭、房総は、戦国の世を迎える。この時代に、大小多数の城が房総各地に築かれた。戦国期前半、房総の情勢は、古河公方・足利成氏を支援する千葉氏と、小弓公方・足利義明を支援する武田氏・里見氏の対立で推移する。16世紀中頃、小田原の後北条氏が房総に侵入、後北条氏と里見氏の対立へと変化、さらに、豊臣氏の小田原征伐、徳川氏の江戸入府を経て、房総は近世の幕藩体制に移行する。

近世 秀吉が北条氏を征して関東の地を家康に与え、次いで家康が江戸に幕府を開くや、房総の地は膝下として重要であるため、幕府は、天領、旗本領や佐倉藩をはじめ譜代の小藩を配置した。初期には9藩、幕末には16藩、明治初年には23藩であった。この間房総の開墾事業は進み、十六島の開拓、椿海干拓約2,800町歩、手賀沼疎水の開通、印旛沼の干拓計画などがあって耕地が大いに拡張され、享保年間には青木昆陽によって甘藷が栽培され、生産は次第に増加した。また行徳に塩田が開発された。一方では、野田、銚子の醤油醸造業もしだいに発達し、江戸はもとより全国に名声をうたわれるに至った。

近代 慶応4年、新政府は府・藩・県の三治の制を定めた。大名領以外の地に、安房上総知県事と下総知県事を置いた。明治2年に管轄地が宮谷県と葛飾県となり、同4年7月、廃藩置県によって24の藩は県となり、計26県を数えた。同年11月、安房上総が木更津県に、下総の大部分が印旛県に、下総東部の香取・海上・匝瑳の3郡が新治県に所属した。同6年6月に木更津・印旛の両県を合併し、県庁を千葉町に置き、千葉県が誕生した。のち同8年5月に新治県が廃止となり、下総東部の3郡が千葉県に編入され、下総の利根川以北の地が茨城県に管轄替えとなって、ほぼ今日の如き千葉県の行政区が確定した。

初代県令は、「県治方向」を著して県政の基本方針を示した。漁業と製茶業を奨励し、2代県令は、養蚕業の発展に努めた。明治32年に水産試験場を、42年に農事試験場を、44年には各郡に稲の原種試験場が設置され、松戸町に県立園芸専門学校を開校した。

現代 戦後、昭和25年ごろ、将来を指向した県政の基本目標が検討された。27年3月、「産業経済振興計画」が立案され、農林水産業を産業構造の根幹としていた本県にも、工業の導入という極めて斬新的な事業が実施に移され、京葉工業地帯の造成が急ピッチで進められた。内陸工業の導入、ニュータウンの造成、新東京国際空港の開港、道路網の整備と県内は大きく変化した。

平成8年度からは、「ちば新時代5か年計画」（平成8～12年度）を実施し、「ひと」を中心とした新たな社会システムを創造することを基本理念に、県民一人ひとりの「幸せ」の実現に向けた新しい千葉県づくりを進める計画である。